

湾岸アラブ諸国における国家統合力学の解析

アラブ首長国連邦の事例を中心に

平成 18 年入学

派遣先国：アラブ首長国連邦・バハレーン王国・カタル国

堀抜 功二

キーワード：湾岸アラブ諸国，アラブ首長国連邦，国家統合，ウルーバ（アラブ性）

対象とする問題の概要

報告者の研究対象である湾岸アラブ諸国（クウェート・サウディアラビア・バハレーン・カタル・アラブ首長国連邦・オマーン）は、石油や天然ガスに恵まれた「豊かな国」としてこれまで理解されてきた。しかし、国内においては政治的・社会的問題を抱えている。独立以来、大量に受け入れている外国人労働者の存在や、グローバル化の影響により、国籍・市民権・宗教・ジェンダー・アイデンティティなど多岐にわたる問題が表面化してきた。とくに、国内で「国民」と「外国人」の境界線が様々なかたちで溶解しており、国家の枠組みそのものを揺らしている。

研究目的

こうした湾岸アラブ諸国の実態を正確に捉えるためには、国家を統合と分裂に作用させる諸力学（ベクトル）を検討し、解析することが必要である。そのためには、従来の研究手法に多い石油を中心とする政治経済学的分析や、「近代国家」をア priori に前提とした議論を乗り越えた、新しい分析枠組みが求められる。そこで、国家統合にかかる力学を、近代化・西洋化 イスラーム ウルーバ（アラブ性）という三つのベクトルに解析し、それぞれに関する具体的な問題・事例を検討する。本研究では、手始めにアラブ首長国連邦（UAE）を事例に取り上げる。とくにウルーバに焦点を当てることにより、近代国家観として自明視されている「ネイション」について問い直す。以上の研究によって、三つのベクトルが作り出す動的な国家像を描写することができる。

フィールドワークから得られた知見について

今回のフィールドワークにおいて、UAE におけるウルーバが国家の枠組みの中で、どのように変容し、政治的・社会的な問題として焦点化されているかを検討した。

ウルーバは、アラビア語・イスラーム・部族（系譜）意識によって成り立っている。UAE におけるウルーバの変容の背景には、図 1 に代表されるように急速な近代化と開発の影響がある。近代化・開発に伴う大量の外国人労働者の流入により、人口バランスが大きく崩れている。今回、UAE で聞き取り調査を行ったファータィマ・アル=サーイゲ先生（UAE 大学）も同様の点を指摘して



図 1. 建築の進むブルジュ・ドバイ

おり、こうした社会的な状況への対応が求められている。

政府が具体的に行っている対応としては、スドゥーク・ザワージュ（結婚基金）やバルナーマジュ・ワタニー（祖国プログラム）などの活動を通じ、UAE ナショナルと外国人の境界線の溶解を防ごうとしている。前者では家族機能の強化を通じて安定的な UAE 社会の構築を目指し、後者では UAE ナショナルとしての愛国心を強化しながらも、現実にある多文化社会へ対応できる環境の整備に取り組んでいた。

また、政治レベルにおける国家統合も、UAE にとって重要な課題である。たとえば、図 2 に象徴されるように、国内のいたるところに 7 首長国を象徴したオブジェを見ることができる。これは、歴史の共有を前面に出した「伝統の創造」と政治的な統合の産物である。

そして、バハレーンおよびカタルにおいても問題発見に主眼を置いたフィールドワークを行った。共通する主要な問題としては、人口規模やバランスと関係するものがあり、今後、UAE と比較研究を考慮する必要があることがわかった。また、湾岸アラブ諸国におけるシーア派の存在をどのように捉えていくか、検討すべき課題を確認した。



図 2 . イッティハード公園



図 3 . ドバイのマアタム（シーア派宗教施設）

今後の展開・反省点

今回の調査は、上述のように UAE を中心に行い、バハレーンとカタルについては問題発見と今後の調査についての見通しを立てた。いずれも今後の調査協力者を確保することができたので、引き続き調査を継続していく。博士予備論文では UAE を中心に取り上げるが、博士論文ではカタル、バハレーン、そしてクウェートなどアラビア湾岸の広域を視野にいれた比較をしていきたい。

今後の課題としては、聞き取り調査の手法の検討や、報告者の語学の向上などが挙げられる。また、一部の内容に関しては事前の準備が十分にできず、現地で調査がスムーズに進まなかったこともある。以上について、より効果的なフィールドワークを行う方法を考えたい。